

ワカサギ、シラウオの調査

(宍道湖・中海水産資源維持再生事業)

松本洋典

1. 研究目的

宍道湖・中海におけるワカサギ、シラウオの資源・生態と、それを対象とする漁業の実態を明らかにし、これら資源の維持・増大を図る。

2. 研究方法

(1) ワカサギ・シラウオ産卵状況調査

平成22年2月に斐伊川河口から約2km上流の灘橋までの間に設けた定点(24箇所)で、エクスマンバージ採泥器(0.02 m²)で採泥し、ワカサギ卵を採集した。試料は10%ホルマリン固定・ローズベンガル染色を行い計数した。また、シラウオ卵についても宍道湖沿岸域一円の11箇所において同様の調査を実施した。

(2) 稚魚分布調査

平成21年7月7日に宍道湖および新建・船川の計6箇所調査船わかさぎ丸を用い、桁引網(目合2mm、全長26m、桁長4.5m)により各箇所30m曳網した。

(3) ワカサギの溜池移植放流後追跡調査

平成13年5月に移植した農業用溜池(約110m×約25m×深さ約6m)のワカサギの生産実態を調べた。

3. 研究結果

(1) 産卵の状況(巻末の資料参照)

採泥箇所数24箇所のうち6箇所からワカサギ卵が確認され、平均産卵密度は1 m²当り33.3粒であった。ワカサギ産卵状況は昨年度よりは改善されたが、18年以降の危機的な状況に大きな変化はない(参考:14~17年度平均2,005個)。

またシラウオについては、①粒の粗い砂地を好んで産み付けている②礫や泥場では極端に産卵数が減る③比較的塩分の高めの水域に産み付けられていることを把握した。さらに近年の覆砂による海浜造成(ヨシ帯造成)に

よる産卵場面積の拡大が示唆された。

(2) 稚魚の分布状況(巻末の資料参照)

今年度の1曳網当りワカサギ稚魚平均入網尾数は0.25尾と、非常に低い水準だった(14~17年度144~279尾)。これは前年度の産卵状況が極めて低水準にあったことに起因すると判断できる。一方、シラウオは3,579尾(同933~2,183尾)と、かなり高水準であった。

(3) ワカサギの溜池移植放流後の漁獲実態

一昨年は約26,000尾(23kg)のワカサギが取上げられたが、猛暑の影響で平成20年度はわずか5尾の収穫しか得られなかった。このため発眼卵放流(平成21年3月に1万粒)の実施、また今年度の漁獲を見合わせて親魚の涵養を図った。さらに平成22年3月にも宍道湖漁協で採取したワカサギ発眼卵放流(3万粒)を実施した。

(4) 今年度の漁獲

今年度の定置網漁獲記録(宍道湖漁協集計)では、ワカサギの漁獲は0であったが、採卵用の親魚漁獲は98尾で、前年の12尾よりはわずかに増加していた。

4. 研究成果

- 得られた結果は、宍道湖漁協のます網組合の役員会および総会、また宍道湖・中海水産資源維持再生事業検討会でも発表した。
- 平成19年度漁期から実施された、1ヶ月間(1/15~2/15)の刺し網の宍道湖全域禁漁は、当面の間継続されることとなった。